

随想

ノーベル化学賞に思う

手放して喜べるか

加藤 宏光

本年十月六日に鈴木章氏、根岸英一氏の日本人二名がノーベル化学賞を与えられることになった、という報道がなされ、日本中が沸き立った。改めて、わが国の化学技術力の高さを実感するといった基調の報道が多い。

両氏の研究テーマであるクロスカップリングという理論・技術は、有機化合物の結合に際して、炭素と炭素を自由に結び付けるためにパラジウム（白金族遷移元素、元素記号Pd）を触媒とすることによって容易に結び付ける新技術だとのことである。

十月七日付けの朝日新聞にはわが国で得たノーベル賞について、年次経過と分野別に詳述されている。

それによれば、物理学賞に湯川秀樹、朝永振一郎、江崎玲於奈、小柴昌俊、南部陽一郎、小林誠、益川敏英の七氏、化学賞に福井謙一、白川英樹、野依良治、田中耕一、下村脩、今回の鈴木章、根岸英一の七氏、医学生理学賞に利根川進氏、文学賞に川端康成、大江健三郎の二氏、平和賞に佐藤栄作氏の一人名があるが経済学賞に該当する人は現れていない。

バブル崩壊をニューエコノミーと呼ばれたマネー経済で切り抜けることに失敗し、愚直なまでに技術力に頼ってやったりカバーしたと思ったところで、リーマンショックによって生じた世界恐慌に巻き込まれて、現在に至っている。その後の二年間を広い視野で見つめ直すと、アメリカの流れに引き込まれて四苦八苦しなから持ち直そうとしているわが国の生き様と一方的な円高を立ち直りの手段としようとする世界の国々のなかで、国の補助によって辛うじて生き残ったアメリカの金融業界が、

不良債権の切り捨てによって少し立ち直りの気配が生じるや、社会の壟断（おん断）を買いながらも、経営者の所得として数十億円を得ようとしていること（さすがにアメリカやイギリスでもこのような理不尽な経済意識に大きな税率で牽制しているもの……）を知るにつけ、経済というアナログバランスにうとい感覚を実感する。また、今回の受賞を手放しで喜んでよいものかについては、少々考えるところもある。日本が得意とする自然科学系のみ限定して獲得数を比較してみると、アメリカ…二

三四人、イギリス・七六人、ドイツ・六八人、フランス・二九人、スウェーデン・一六八人、スイス・一五人、日本と旧ソ連、オランダ・各一四人、デンマークとカナダ・各九人である。アメリカの二三四人は別格で、さらにドイツまではわが国の四倍を超えるので、競合対象から外すとしても、スウェーデンやスイスが一六、一五人であり、それぞれの総人口、九〇〇万人と七〇〇万人を前提するとノーベル賞受賞者一人当りの人口は五六万人、四六万人ほどになる。リストの最下位デンマーク、カナダでも六一万人、三三三万人である。一方日本では九二五万人であり、わが国のサイエンス力が世界に誇れると言うには少々心許ない。加えて一四人の中でアメリカにおいて研究し、アメリカ人と共同研究で取得しているケースが多いことまで考えると、研究環境が決して恵まれている

とは言えないことに心を新たにしなければならない。

今回の受賞は両氏が三〇年近く前に行った研究の実績がフィールドで検証された結果の評価であったと聞くにつけ、すべてが一朝一夕になるものではないことを実感する。

この三〇年を振り返ると、経済面からは、①急速な経済成長と、②労働力枯渇による各産業における単純作業の装置・機械化がおこり、③次いで土地神話に基づくバブル経済、④続くその崩壊と経済失速、⑤なかなか回復しないがゆえに「失われた一〇年」と呼称されたデフレ経済の継続、⑦岩戸景気を上回るとされる実感のない経済回復に引き続き、⑧リーマンショックと世界恐慌に瀕したグローバル経済と大きく八つのフェーズに分けられる(平均すると、およそ三・七五年であることを記憶されたい)。

この間に、ゆとり教育と称

された教育の義務不毛期がおよそ一〇年、それに向かう劣化への道筋が約五年余り、そして失敗への反省から来た道へ戻ろうとしているこの二年余り。合わせて二〇年弱の長きにわたって義務教育が十分に実施された子どもたちが育まれている。義務教育の始まりが六歳で、義務教育をこれまで通り中学校までとして、現在の二五〜三一歳までの若者の義務教育には欠陥があった可能性が高い。その要因として均一主義、誰もが同じであるべきだ、という彼らの親世代(現在の五〇〜六五歳世代)の思い込みと「自分の子どもには辛い思いをさせたくない」というその時々々の利根的な親心を挙げなければならぬまい。

先日、私立獣医大学の前教授にお目にかかって、いろいろな話をした。

その折に著者が力説したのは、《小学校教諭にこそ尊敬

の目と社会的地位を与えるべきである》という点である。子どものも最も感受性に富んだこの時期に、どのような先生が《それぞれの夢を探してくれるか》がその子の将来を決める、というのが著者の信念である。

しかるに、この大事な時期に教育に当たる方々に対し、親が《その時々々に自分の子どもを大事にすることを強要し、そうでない場合は脅迫めいた行為をとることさえ稀ではない》というのが現状であるという。

そのような環境で育った子ども(人たち)の頭上に三〇年後ノーベル賞の評価があるものであろうか??

三〇年前ですら研究環境が貧しかったことまで加味すれば、われわれ日本人はまだまだ謙虚であらねばならないと考えるものである。